

○出土文物に見る神農

孟子に見る神農>『孟子』・滕文公章句上

- ・「有為神農之言者許行、自楚之滕」。
- ・「其徒數十人、皆衣褐、捆屨、織蓆以為食」。
- ・「陳良之徒陳相與其弟辛、負耒耜而自宋之滕」。
- ・「見許行而大悅、盡棄其學而學焉」。
- ・「賢者與民並耕而食、饗飧而治」。

「神農の言葉を旗印に唱える許行の一行が、楚から滕の国に来た」。「其の徒は數十人で、皆褐（粗末な衣類）を着て、捆屨（麻で作った靴）、織蓆（蓆を織って）売って食事にしてた」。「（許行の思想に共鳴して）、儒者であった陳良の弟子の陳相とその弟辛が、耒耜（すき）を背負って宋の国から滕にやってきた」。「許行と出会って大いに悦び、盡く其學を棄ててこれを學ぶ」。「賢者は民とともに耕して食し、食が充実に治る」。

・「孟子曰、「許子必種粟而後食乎」。曰、「然」。「許子必織布而後衣乎」。曰、「否。許子衣褐」。「許子冠乎」曰、「冠」。曰、「奚冠」曰、「冠素」。曰、「自織之與」曰、「否。以粟易之」。曰、「許子奚為不自織」。曰、「害於耕」。

「孟子は、「許子は必ず粟を種えて後に食べるのか」。というと、（陳相は答えて）いうに、「はいそうです」。「許子は必ず布を織ってから後に衣とするのか」。いうに、「そうではありません。許子は褐を衣としています」。「許子は冠をしているのか」。いうに、「冠しています」。いうに、「どのような冠なのか」。いうに、「素を冠しています」。いうに、「自らこれを織ったのか」。いうに、「そうではありません。粟と交換したのです」。いうに、「許子はどのようにして自ら織らないのですか」。いうに、「耕作の害になるからです」。

- ・「陳良、楚産也。悦周公、仲尼之道、北學於中國」。

「陳良は、楚の産である。周公、仲尼の道を悦び、北にきて中國に學んだ」。

・「從許子之道、則市賈不貳、國中無偽。雖使五尺之童適市、莫之或欺。布帛長短同、則賈相若、麻縷絲絮輕重同、則賈相若、五穀多寡同、則賈相若、屨大小同、則賈相若」。

・「許子の道に従えば、市の賈（價）に二つはありえないし、國中偽りがなくなる。（孟子の答えていうに）五尺の童を市に適（ゆ）かすとといえども、このようなことはなく、あるいは欺かれる。布帛の長短が同じでも、賈は相（たが）いに異なり、麻縷絲絮の輕重が同じでも、賈は相（たが）いに異なり、五穀の多寡同じでも、賈は相（たが）いに異なり、屨の大小同じでも、相（たが）いに異なる（を知っている）」。

『呂氏春秋』愛類

神農之教曰、『士有當年而不耕者、則天下或受其饑矣；女有當年而不績者、則天下或受其寒矣。』故身親耕、妻親績、所以見致民利也。

神農の教に『士が壮年で耕作をしなければ、天下はもしかすると饑えることになるかもしれない。女が壮年で績むがないならば、天下はもしかするとその寒さを受けることになるかもしれない』という。だから身で親（みずから）耕し妻親績ぎ、民の利（利益）を致らすを見ることができる。

『莊子』・盜跖第二十九

神農之世、卧則居居、起則于于、民知其母、不知其父、與麋鹿共處、耕而食、織而衣、無有相害之心、此至德之隆也。

神農の世、床につけば安らかで、起きれば自ら楽しみ、民その母を知り、その父を知らず。麋（ビ、おおしか）鹿と共にいて、耕して食べ、織りて衣とする。たがいに害する心はなく、これ徳の隆きに至るものである。

《商子》畫策第十八 秦・商鞅

神農之世、公耕而食、婦織而衣、刑政不用而治、甲兵不起而王。

神農の世、公は耕して食べ、婦は織って衣る。刑を政に用いないでも治り、甲兵（戦争）は起こらないでも王であった。

『漢書芸文志』の神農

『漢書芸文志』參十卷

『神農二十篇』「六國時、諸子疾時、怠於農業、道耕農事、託之神農。師古曰、劉向別録云。疑李悝及商君所説」。

（農家）六國の時、諸子が疾時（にくみあい）、農業を怠たる。耕農の事を道（いっ）て、これを神農に託したものである。師古がいうに、劉向別録にいう、おそらくは李悝及び商君の説くところである。

『神農兵法一篇』（兵家・陰陽家）

『神農大幽五行二十七卷』（數術・五行家）

『神農教田相土耕種十四卷』（數術・雜占家） 按>農事の作物占いか。

『神農黃帝食禁七卷』（方技・經方）>神農本草經に繋がるか。

『神農雜子技道二十三卷』（方技・神僊）>身體技法

神農の伝説

史記の五帝本紀黃帝

軒轅之時、神農氏世衰、諸侯相侵伐、暴虐百姓、而神農弗能征、於是軒轅乃習用干戈以征不享、諸侯咸來賓從、而蚩尤最為暴莫能伐、炎帝欲侵陵諸侯、諸侯咸歸軒轅、軒轅乃修德、振兵治五氣、藝五種、撫萬民度四方、教熊羆貔貅獬廌、以與炎帝戰於阪泉之野、參戰然後、得其志。蚩尤作亂不用帝命、於是黃帝乃徵師諸侯、與蚩尤戰於涿鹿之野、遂禽殺蚩尤、而諸侯咸尊軒轅為天子、代神農氏、是為黃帝。

軒轅（ケンエン黄帝）の時、神農氏の世は衰え、諸侯は相に侵略攻撃をして、百姓をしいたげたが、神農はここで彼らをうつことができなかつた。このとき軒轅は武器を用いて従わないものを征伐した。そうすると諸侯はことごとくきて従うも、蚩尤（シユウ）は最も暴虐で征伐することができなかつた。炎帝は諸侯を侵し従わそうとしたが、諸侯はことごとく軒轅に帰順した。軒轅は徳を修め、兵を盛んにして天地の五の氣を治め、五の種の穀物を植えて、萬民をやすらかにすること四方におよぶ、熊、羆（ひぐま）、貔貅（ヒキユウ）、獬廌（チョコ大きな虎）を教化して、もって炎帝と阪泉之野で戦かう。参戦してのち、その志をえた。蚩尤は亂をなして帝の命を用いず。ここで黄帝は諸侯をあつめ率いて、蚩尤と涿鹿の野で戦った。遂にとらえて蚩尤を殺し、そうすると諸侯はことごとく軒轅を尊敬して天子をな

して、神農氏と代わって、黄帝となった。

皇覽曰、蚩尤冢在東平郡壽張縣鬪鄉城中、高七丈、民常十月祀之。有赤氣出如匹絳帛、民名為蚩尤旗、肩髀冢、在山陽郡鉅野縣重聚大小與鬪冢等、傳言黃帝與蚩尤戰於涿鹿之野、黃帝殺之身體異處、故別葬之。

東平郡＞山東省、鉅野縣＞山東省

『禮記』祭法

厲山氏之有天下也。其子曰農。能殖百穀。鄭玄注、厲山氏炎帝也。起於厲山、或曰有烈山氏。夏之衰也、周棄繼之。故祀以為稷。共工氏之霸九州也。其子曰、后土。能平九州、故祀以為社。

厲山氏の天下があった。その子は農という。よく百穀を殖える。鄭玄の注に、厲山氏は炎帝である。厲山に起こる。あるもの烈山氏があるという。夏が衰えて、周の棄がこれを繼いだ。だから祀って稷とした。共工氏が九州の覇となって、その子を后土という。能く九州を平らげ、だから祀って社とした。＞この農は必ずしも神農を指すとは限らないか。

『淮南子』脩務訓

古者、民茹草飲水、采樹木之實、食羸虵之肉。時多疾病毒傷之害、於是神農乃教民播種五穀、相土地宜燥濕肥瘠高下、嘗百草之滋味、水泉之甘苦、令民知所辟就。當此之時、一日而遇七十毒。

羸虵＞にな貝のたぐい。ラ、ボウ

古は、民は草を喰い水を飲み、樹木の實を採って、羸虵（にな貝）の肉を食べていた。その時疾病や毒や傷の患が多かった。そこで神農は民に五穀の播種を教えるに、土地の乾燥、濕氣、肥てるか瘠（やせ）ているか、高いか低いかなど宜（ふさわ）しいところを相（み）て、百草の滋味水泉の甘苦を嘗め、民に辟（さけ）るところ就（つ）くところを知らしめた。この時、一日に七十の毒に会う。

『國語』卷第十晉語四 作者、左丘明

重耳婚媾懷嬴

昔少典娶于有蟠氏、生黃帝、炎帝。黃帝以姬水成、炎帝以姜水成。成而異德、故黃帝為姬、炎帝為姜、二帝用師以相濟也、異德之故也。

昔、少典は有蟠氏を娶とり、黃帝、炎帝を生む。黃帝は姬水で成長し、炎帝は姜水で成長した。成長して徳が異なり、そこで黃帝は姬の姓、炎帝は姜の姓となった。二帝は軍隊を用いるときは同じであるが、徳において異なっている。

『淮南鴻烈解』卷五 時則訓 漢 高誘 注

赤帝炎帝、少典之子、號為神農、南方火德之帝也。

赤帝は炎帝、少典之子である。號して神農という、南方火徳の帝である。

神農の伝説はいつなのか。

『神農の五千年』

夏殷周の年代。夏（二里头文化）B.C. 2070-1600 殷（二里崗文化、殷墟）B.C. 1600-1046 周 1046-770
（宮本一夫 309 p）

三皇五帝の時代。河南龍山文化 B.C. 2800-2000・山東龍山文化 B.C. 2600-2000（五帝の時代？）

大汶口文化は早期 B.C. 4100-3500、中期 B.C. 3500-3000、後期（B.C. 3000-2600 の 3 つの時期。母系社会から父系社会へ

仰韶文化の年代は B.C. 5000-3000。自給自足生活。母系社会。農作、狩猟や漁業。一部家畜。養蚕。北東部の 6000-5000 年前の遺骨からハプログループ N（Y 染色体）が確認ウラル系民族。

> 仰韶文化は神農時代か？ 龍山文化は黄帝時代か？ 大汶口文化は蚩尤時代か？

『白虎通義』 徳論上 號 漢 班固 撰

謂之神農何。古之人民皆食禽獸肉、至於神農、人民衆多、禽獸不足、於是神農、因天之時分地之利、制耒耜、教民農作、神而化之、使民宜之故、謂之神農也。

これを神農というのはなぜか。古の人民、皆禽獸の肉を食べ、神農に到って、人民は衆（あ）つまって多くなり、禽獸が不足した。そこで神農は、天の時によって地の利を分かち、耒耜を作り、民に農作を教え、神と化して、民の便宜をはかることによって、これを神農というのである。> 寒冷化の時代

馬王堆出土帛書『帛書周易』「繫辭」。

神戎(農)是(氏)作、斲木為 **杲** (耜・耜)。揉(揉揉)木為耒耨二(耨)耨、耨耨耒之利、以教天下、蓋取者(諸)《益》也。日中為族(挨(市))、至(致)天下之民、聚天下之貨、交易而 **徳** (退)、各得元(其)所欲、蓋取者(諸)《筮(噬)蓋(噬)》也。神戎(農)是(氏)沒、

祥按> 神戎(農)氏となる、木を斲り **杲** (耜・耜)となし、木を揉(揉揉)めて耒耨(耨・耨)となす、耨(耨・耨)耒の利、以って天下に教へ、蓋し取ものは、(諸)『益』なり。日中に族(挨(市))をなし、天下の民に至(致)す、天下の貨を聚め、交易して **徳** (退)く、各の元(其)の欲するところを得て、蓋し取るものは(諸)『筮(噬)蓋(噬)』なり。神戎(農)是(氏)沒して、> 「噬嗑(ぜいごう)」

『易經』繫辭伝

「神農氏作、斲木爲耜揉木爲耒、耒耨之利、以教天下、蓋取諸益、日中爲市、致天下之民、聚天下之貨、交易而退、各得其所、蓋取諸噬嗑。神農氏沒」。

銀雀山竹簡『孫臏兵法』「見威王」。

昔者、神戎(農)戰斧遂(255 簡)

> 斧遂、或作補遂。『戰國策』「秦策」。昔者、神農伐補遂。

銀雀山竹簡殘簡

……神戎（農）竝耕而王天下……3315 簡

『史記』「高祖本紀第八」。

乃立季為沛公。祠黃帝、祭蚩尤於沛庭、而夔鼓、旗幟皆赤。

すなわち季を立てて沛（ハイ）公となす。黃帝を祠つり、蚩尤を沛庭に祭る。鼓に夔（キン）して、旗や幟（のぼり）は皆赤色だった。

集解應劭曰、「左傳曰黃帝戰於阪泉、以定天下。蚩尤好五兵、故祠祭之求福祥也」。

集解應劭曰、「夔、祭也。殺牲以血塗鼓曰夔」。瓚曰、「案禮記及大戴禮有夔廟之禮、皆無祭事」。索隱說文云、「夔、血祭也」。司馬法曰、「血于鼙鼓者、神戎器也」。顏師古曰、「凡殺牲以血祭者、皆名為夔」。臣瓚以為「皆無祭事」、非也。又古人新成鐘鼎、亦必夔之。應劭云、「夔呼為豐」。馬融注周禮灼龜之兆云、「謂其象似玉、瓦、原之夔、是用名之」。此說皆非。

索隱に、說文には、「夔（キン）は、血祭である」。という。司馬法に、「鼙（ヘイ）鼓に血ぬるものは、神戎の器である」という。顏師古は「およそ牲を殺して血祭するものは、皆夔と名づける」という。

>後日、麥谷先生から「神戎器也」「戎器を神むなり」と讀むべきとのご指導をうけました。戎器は武器という意味。

羌と姜

姜『説文解字』神農居姜水、以為姓。从女羊聲。段注、（姜）神農居姜水、因呂為姓。

羌『説文解字』西戎牧羊人也。从人从羊，羊亦聲。

「羌本姜」『尚書說』宋 黃度

「羌讀為姜」。古文字通假釋例 王輝

姜『康熙字典』神農居姜水、以為姓、其後為齊甫、申呂、紀許、向芮。

漢舊儀補遺卷下 漢議郎衛宏撰 清孫星衍校集

春始、東耕於藉田、官祠先農。先農即神農炎帝也。祠以一太牢、百官皆從。皇帝親執耒耜而耕。天子參推、參公五、孤卿十、大夫十二、士庶人終畝。大賜參輔二百里孝悌、力田、參老布帛。百穀萬斛、為立、藉田倉、置令、丞。穀皆給祭天地、宗廟、群神之祀、以為粢盛。

校集、太平御覽引作「春日」。續漢志補注引此句在下文「以為粢盛」。下、又有「古為甸師官」。五字。明帝紀注引有「皇帝親執耒耜」以下、無下文「大賜、參輔」。以下十九字。、明帝紀注引「為立」。作「乃致」。（後漢書明帝紀注、續漢志補注、北堂書鈔禮儀部、太平御覽禮儀部）

漢舊儀に、春始めに東で藉田を耕す、官は先農を祠つる。先農は即ち神農・炎帝である。祠つるに一大牢をもってし、百官皆従う。皇帝、親ら耒耜を執りて耕す。天子は參推し、參公は五、孤卿は十、大夫は十二、士庶人は畝が終るまで。參輔（長安近郊）の二百里の孝悌（孝行もの）、力田（篤農家）、參老（土地の有力者）に布帛を大いに賜わった。

『漢書』「文帝紀」、「景帝紀」、「武帝紀」、「昭帝紀」、『後漢書』「孝明帝紀」、「禮儀志」、「祭祀志」に親耕と祠先農の関連記事がある。史志龍「秦「祠先農」簡再探」『中國簡帛學國際論壇 2009』

周家台秦簡の先農の祭祀

・先農 以臘日、令女子之市買牛胙、市酒。過街、即行^擗（拜）、言曰、「人皆祠 泰父、我獨祠先農」。到困下、爲一席、東鄉(向)、參臠、以酒沃。祝曰、「某以壺露、牛胙、爲先農除舍。先農筍(苟) 令某禾多一邑、先農恒先泰父食。「到明出種、即□【邑最富】 者、與皆(偕)出 種。即已、禹步參出種所、曰、「臣非異也、農夫事也。「即名富者名。曰、「某不能腸(傷)其富、農夫使其徒來代之」。即取臠以歸、到困下、先侍豚、即言困下曰、「某爲農夫畜、農夫筍(苟)如□□、歲歸其禱」。即斬豚耳、與臠以并塗困廡下。恒以臘日塞禱如故。

・先農 臘日に、女子に市に之（行）かし牛胙と市酒を買わしめる。街を過ぎつつ、^擗（拜）を行い、言葉していうに、「人は皆泰父を祠つるも、我獨り先農を祠つる」。困の下に到り、一席をつくり、東に郷(向)い、参び臠（まつり）を續け、酒をもって沃ぐ。祝して曰く、「某、壺露と牛胙をもって、先農のために舍を（掃）除せん。先農、筍(苟)も某禾を一邑に多くせしめよ、先農は恒に泰父の食に先ぜよ」。明に到り種を出す。即ち□【邑の最富】もの、ともにみな種を出だす。すでにおわりて、種を出す所で禹歩を参たびする。曰く、「臣は異にあらざるなり、農夫を事とするなり」。即ち富者の名を名のる。曰く、「某はその富を腸(傷)つけるあたわず、農夫はその徒として來りて之に代らしむ」。即ち臠（まつり）を續けもって歸り、困の下に到り、先ず豚を侍（持ち）、即ち言葉して困の下で曰く、「某、農夫の畜のために、農夫、筍(苟)も如□□、歲とともに其禱を歸さん」。即ち豚の耳を斬り、ともに臠（まつり）續け、以って并せて困の廡（わら）の下に塗（塗）る。恒に臘日をもって、塞禱（さいとう）この如くせよ。

>塞禱（さいとう）、願をほどく意味。

里耶秦簡 秦の始皇帝 32 年 (BC215) 3 月 20 日

卅二年參月丁丑朔丙申、倉是佐狗禱出、祠先農、餘徹羊頭一、足四、賣於城旦赫、所取錢四□……（14 層 簡 300、764 綴合）

卅二年參月丁丑朔丙申、倉の役人は（人名）、佐（助手）の狗（人名）が禱り出て、先農を祠つり、餘りの取り下げた羊の頭一、足四を城旦の赫に賣った。得たお金は四□……

神農と本草經の合体

漢書卷十二 平帝紀 元始 5 年（5 年）

徵天下通知逸經、古記、天文、曆算、鍾律、小學、史篇、方術、本草及以五經、論語、孝經、爾雅教授者、在所為駕一封軺傳〔一〕、遣詣京師。至者數千人。

漢書卷二十五下 郊祀志第五下 成帝（前 52—前 7）

候神方士使者副佐、本草待詔七十餘人皆歸家。

師古曰、「本草待詔、謂以方藥本草而待詔者」。

漢書卷九十二 游俠傳第六十二

樓護字君卿、齊人。父世醫也、護少隨父為醫長安、出入貴戚家。護誦醫經、本草、方術數十萬言、長者咸愛重之

樓護、字は君卿、齊の人。父は世醫である。護は少より父に随って醫を長安でしていた、出入貴戚の家
に出入していた。護は醫經、本草、方術の數十萬言を誦して、長者咸くこれを愛重した。

○出土文物に診る扁鵲

扁鵲の傳記は、『史記』扁鵲倉公列傳に詳しい。

扁鵲者、勃海郡鄭人也、姓秦氏、名越人。少時為人舍長。舍客長桑君過、扁鵲獨奇之、常謹遇之。長桑君亦知扁鵲非常人也。出入十餘年、乃呼扁鵲私坐間、與語曰、「我有禁方、年老、欲傳與公、公毋泄」。扁鵲曰、「敬諾」。乃出其懷中藥予扁鵲、「飲是以上池之水、參十日當知物矣」。乃悉取其禁方書盡與扁鵲。忽然不見、殆非人也。扁鵲以其言飲藥參十日、視見垣一方人。以此視病、盡見五藏癥結、特以診脈為名耳。為醫或在齊、或在趙。在趙者名扁鵲。

扁鵲は、勃海郡の鄭の人である。姓は秦氏、名は越人。若い時人舎の長となる。舎の客長桑君過ぎるに、扁鵲は獨り彼を奇として、常に謹しんで彼を遇した。長桑君また扁鵲の常人に非ざるを知る。出入すること十餘年、すなわち扁鵲を呼びて私かに間に坐して、ともに語りて「我に禁方があり、年老いて、公に傳へ與ようと欲む、公よ泄すことなかれ」いう。扁鵲「敬しんで諾す」という。すなわちその懷中より藥を出し扁鵲に予える。「これを飲むに上池の水をもってすれば、參十日にしてたちまち物を知ことができる」。すなわち悉くその禁方書を取って盡く扁鵲に與えた。忽然して見えなくなった、殆ど人に非ず。扁鵲はその言をもって飲藥して參十日、垣の一方の人を視る。これをもって病を視れば、盡く五藏の癥結を見え、特に診脈をもって名をなした。醫となってあるいは齊にあり、あるいは趙にあり。趙にあるときには扁鵲と名のつた。

扁鵲の傳記資料

『史記』扁鵲倉公列傳、

『說苑』「辨物」。劉向著《》

『韓詩外傳』

『新序』「雜事二」

『列子』「湯問」。

『鶡冠子』「世賢」この本が戰國期のものなら注目。參人兄弟の話

『韓非子』「喻老」「安危」これらの編が戰國期に出来たなら、扁鵲列傳の最後の文章は成り立たない。

「秦太醫令、李醯自知伎不如扁鵲也。使人刺殺之。至今天下言脈者、由扁鵲也」。

「秦の太醫令、李醯は自ら伎（わざ）扁鵲に及ばないを知る。人をしてかれを刺殺せしめた。今にいたるまで天下で脈をいうものは、扁鵲によるのである」。

大量の醫學の竹簡が出土・扁鵲の名前

920支の竹簡のうち736支の竹簡は、内容が9部の醫學書である。いくつかの醫學書は扁鵲の学派

のものと言われている。医学の竹簡は2ヶ所に置かれていた。

『五色脈臟論』という醫書以外は、すべて書名がなかった。

初步的な整理過程で暫定的に『敝昔醫論』『脈死候』『六十病方』『尺簡』『病源論』『経脈書』『諸病症候』『歸脈数』と名付けられた。

『敝昔（へいせき）』は扁鵲の通假字であると推定されている。この他に184支の『馬醫書』が出土した。

老官山の醫學史料

鍼灸の分野

漆経絡人形と鍼灸の経絡文獻と石法と呼ぶ砭石の治療法など

藥物療法の分野

各症状の處方と藥物の出土など

老官山の扁鵲

敝昔（扁鵲）曰、白乗白、病自己、所謂白乗白者 29

敝昔（扁鵲）曰、心病之正、亟微亟精、以觀死生可□□31

敝昔（扁鵲）曰、人有九微（竅）五臧（臟）十二節、皆鼂（朝）于氣 32（『素問』生氣通天論參照）

敝昔曰、所謂五色者、脉之青白相乗者、脉□48

敝昔（扁鵲）曰く、白が白に乗るは、自己（みずから）病むなり、いわゆる白が白に乗るものは（29簡）

敝昔（扁鵲）曰く、心病の正、亟（極）めて微、亟（極）て精、以って死生を觀る可□□（31簡）

敝昔（扁鵲）曰く、人に九微（竅）、五臧（臟）、十二節あり、皆、氣に鼂（朝）す。（32簡）

敝昔（扁鵲）曰く、いわゆる五色とは、脉の青白相乗るものなり、脉□（48簡）

診断学の資料

五色通天、凡脉之出入與五色相應也。猶鼓之應聲也、猶影象刑（形）也（50簡）（『靈樞』外揣參照）

脉風者、其脉赤白、其禺（遇）風寒不樂、口卧則汗出、如此者、陰陽之脉擇……（89簡）

所以論有過之脉也、其余必謹察脉當脉出・參陽、天氣也。其病唯破骨絶筋削膚、不死。凡參陰、地氣也。（587簡）

相脉之過、左手直（置）【果】（踝）五寸而案之、右手直（置）果（踝）而單（彈）之。應手如參春、死；不至如食間死。它脉盈、此獨[虚、則主病]（623簡）（『素問』參部九候論參照）

心氣者赤、肺氣者白、肝氣者青、胃氣者黄、腎氣者黑、故以五臟之氣□（696簡）

五色の通天、およそ脉の出入は五色と相應ずる。なお鼓の聲に應じるがごときであり、なお影の刑（形）を象（像うつ）すがごときである。（50簡）（『靈樞』外揣參照）

脉風とは、その脉赤白く、それ風寒に禺（遇）えば樂でなく、口卧すと汗が出て、かくのごときものには、陰陽の脉擇……（89簡）

だから有過の脉を論じるのである、それが余（餘）りであれば必ず謹んで脉を察してまさに脉出すべきである・參陽は、天の氣である。その病はただ骨が破れ筋が絶え膚が削れても、死なない。およそ參陰は、地の氣である。（587簡）

脉の過を相（み）るに、左手を【果】（踝）の五寸に直（置）きてこれを案（おさえ）る。右手を果（踝）に直（置）いてこれを單（弾）く。手に應じて參（參）たび春（つく）ようであれば、死ぬ。至らないこと食間のごきときは死ぬ。その脉盈（みち）れども、これ獨り[虚、則主病]（623 簡）（『素問』參部九候論參照）

心の氣なるものは赤、肺の氣なるものは白、肝の氣なるものは青、胃の氣なるものは黄、腎の氣なるものは黒、故に五臟の氣をもって□（696 簡）

発見された漆経穴人形

発見された漆経絡人形から、赤線、白線の意味が研究され、體表に刻まれた兪（腧穴）の意味、三焦學説の理解などが進んだ。

赤線、白線から十二經脉の發展が跡づけられ、三陰三陽の形に構成されていることが明白となった。

とくに心主の脉の存在が注目され、馬王堆の『足臂十一脉灸經』『陰陽十一脉灸經』からより整然とした理論體系になっている。また任脉の記述が體表にある。

漆経穴人形の体表の文字

背部正中に「心」「肺」「肝」「胃」「腎」

黄龍祥はこの「心」「肺」「肝」「胃」「腎」は兪（腧穴）の名前とする。

肩に「欠盆」？

脇に「兪淵」？

石法の治療

石法の治療では、石と友の2つの方法が示されている。これらの治療は砭石の治療法であり、すでに廢れて知られなくなった治療法である。

石法の記載は『診治論』『逆順五色脉藏驗精神』の2つに集中して記載されている。

石法の起原

『山海經』東山經：「高氏之山、其上多玉、其下多箴石」。晋・郭璞注：「箴石、可以為砭（砭）針、治癰腫者」。

『説文解字』砭「以石刺病也」。段玉裁注「以石刺病曰砭、因之名其石曰砭石」。

『史記』扁鵲倉公列傳、

扁鵲乃使弟子子陽厲鍼砭石、以取外參陽五會。有間、太子蘇。

扁鵲すなわち弟子の子陽に鍼を厲（と）ぎ石を砭にあてさせて、もって外に參陽五會を取る。間ありて、太子蘇（いきかえ）る。

友について

夏友（發）夾口、石太陰、則秋不肩北（背）痛、秋友（發）其兪、石太陽、則（83 簡）冬不筋骨痛、四支（肢）不困、此四時之勝也（69 簡）

・友（發）之方、病淺石而友（發）之、病深則友（發）而石之、血多蓋傳之、血少（675 簡）

夏に夾口に友（發）し、太陰に石する。則ち秋には肩北（背）痛まない。秋に其俞を友（發）し、太陽に石すれば、則ち（83簡）冬に筋骨痛まない。四支（肢）は困らない。これは四時の勝ところである。（69簡）

・友（發）の方、病淺ければ石してこれに友（發）する、病深ければ友（發）してこれに石する。血多ければ蓋してこれに傳（は）る。、血少ければ。（675簡）

『説文』に「走犬兒。从犬而ノ之。曳其足、則刺友也。蒲撥切」とあり、その段玉裁の注に「友とは 犬の走る兒（かたち）である。篇に依りて、韻を訂す。犬によってこれにノとする。その足を曳く、すなわち刺友である。ノとは余制切である。挫である。挫とは、引ことである。刺友とは、行く兒（かたち）である。刺の音は辣である。友と音と義は同じである。下にいう。足刺である。蒲撥切である」とある。『康熙字典』には『唐韻』『集韻』『韻會』『正韻』によれば「蒲撥切である、音は跋である」という。

『六十病方』

『六十病方』では、「題名簡」には處方名があり、それぞれに対応した處方が記載されている。處方の数は81種で剤型は8種である。

『六十病方』の病證は、内科の病證が43症、外科の病證が12症、婦人科2症、小兒科1症、耳鼻咽喉科眼科2症である。

薬物療法が扁鵲に由来するものかどうかは不明。

倉公に傳授された脈書

『史記』倉公傳

慶年七十餘、無子、使意盡去其故方、更悉以禁方予之、傳黃帝、扁鵲之脈書、五色診病、知人死生、決嫌疑、定可治、及藥論、甚精。

慶年七十餘、子なし、意にその故方を盡く（取り）去らしめ、更に悉く禁方をもってこれに予（あた）えた。『黃帝、扁鵲之脈書』、『五色診病』、『知人死生』、『決嫌疑』、『定可治』、及び『藥論』を傳えて、はなはだ精しい。

『北京大學藏西漢竹書』の醫方（武帝後期）

「秦氏方」という處方がある。これは扁鵲すなわち秦越人の處方と言われている。まだ出版されていない。

扁鵲鍼灸行醫圖

劉敦愿の論文

「漢画像石的針灸図」『文物』1972-6

山東省の微山県両城山の4点の画像石

半鳥半人の像を扁鵲と推定する

左手で脈を取り、右手で鍼を持っている

東方の種族はもともと鳥のトーテムだった

まとめ

『孟子』や『呂氏春秋』『莊子』『商子』から神農の農本主義の説を検討した。素朴な農業を反映して母系社会を主体とする文化がうかがわれた。

『史記』記事から神農、黄帝、蚩尤の事跡を考えると新石器時代の文化圏に反映するのではないかと推測した。

銀雀山竹簡『孫臏』や馬王堆『帛書周易』の神戎の表記が本来の神農ではなかったかと推論し、西方の西戎や羌族との関係を想起して仰韶文化の範囲が神農を象徴とする部族であったと考えた。

すでに秦代に見られる先農祭祀と神農の結びつきを考えると後漢には先農と神農の同一視が表れた。

扁鵲の傳説は、すでによく研究されている。このたび出土した老官山の醫書に扁鵲の文献が現れ、これらの文献が一つの定點となり新たな研究が進むと思われる。扁鵲は脉診や色などの診断に特徴がみられた。

神農の思想として傳へられた農業と食料の問題は、とりもなおさず現代の課題でもある。食料自給率が30%を割りこむこの國家は安全ではない。理想の國家は九年の食料備蓄があつて安泰という理想を見つめなおすべき時に来ている。